研究論文

ある校長経験者からみた校長退職後の斎藤喜博の活動
－学校行脚とその遺産を中心に－

久保田　武[1]

斎藤喜博（以下原則として斎藤と表記）は、群馬県佐波郡島小学校長（1952～63）、境東小学校長（1963～64）、境小学校長（1964～69）時代の実践で、戦後日本の教育界に大きな足跡を残した。筆者は、斎藤に関わる文献リストを本学紀要第1号に[1)]、島小時代の校長像を紀要第2号に[2)]、境東小と境小校長時代の校長像を第3号に[3)]発表した。今回は、校長退職後死去するまでの斎藤の活動を、教育行脚、特に学校行脚に焦点をあてて整理し、現役時代に続く彼の業績と遺産を明らかにする。これがこの小論の目的である。

退職後の彼の活動を整理すると、全国各地の学校現場を訪問し子どもと教師を指導した「学校行脚」を核とする「教育行脚」―学校行脚以外の教育講演活動を含むーと、従事した「大学教育」－広い意味では学校行脚に含まれると考える、自宅を開放して行われた「第三日曜の会」、「教育科学研究会」と「教授学研究の会」に関連する活動（林竹二との出会いと別れを含む）、「教育関係著述活動」、そして「歌人としての活動」になる。しかしその内容は膨大かつ広範囲であり、限られた紙面の中で全体を網羅することはできなかった。特に授業学研究の会に筆者は出席したことがないので簡単に紹介する程度に留めている。さらに歌人としての活動には全く触れていない。反対に学校行脚については、斎藤にははるかに及ばないが、筆者も校長として学校改革に取り組んだので、重点的に取り上げた。なお全体を通して、年譜[4)]を資料として重要視し、行脚の部分をそれぞれ表にまとめて掲げるようにした。年譜は彼の心、考え方、生活を理解する上で不可欠な資料と判断したからである。斎藤の死後、彼の「遺産を継承」し、学校現場に広め続けている人たちの活動も紹介しておいた。

キーワード：　斎藤喜博、教育行脚、学校行脚、大学教育、第三日曜の会、遺産の継承、横須賀薫、林竹二、教授学研究の会

1　日本教育大学院大学　学校教育研究科

1．はじめに

私は、校長退職後の斎藤の活動を総括した先行文献をまだ知らない。斎藤を良く知る横須賀薫（以下原則として横須賀と表記）に確かめたところやはり知らないとのことであった。もちろん彼の生涯にわたる仕事や生きざまを取り上げた立派な文献は存在する。中でも「斎藤喜博　人と仕事」国土社 1997 の著者、横須賀（元宮城教育大学学長・現在十文字女子大学学長代行）は、大学人として斎藤を誰よりも深く理解し、最も長時間接触し、それでいて彼にのめりこまなかった人物である。特に宮城教育大学や教授学研究の会での斎藤の活動を助け、学校行脚校に時折同行し、病状悪化のためやり遂げられなかった月刊研究誌「事実と創造」の創刊号発刊に漕ぎつけている。しかし斎藤の学校行脚については、同書の中であまり触れていない。また「評伝　斎藤喜博—生き方と仕事」一莖書房 1991 を書いた笠原肇（元室蘭啓明高校教諭）は、斎藤が学校改革に入った学校名と校長名をあげ、校長の苦労話を、エピソードを交えて紹介している。しかし斎藤の指導内容や成果は、あまり書いていない。両者の著書は、ともに斎藤の仕事（特に横須賀）と経歴（特に笠原）を網羅しているだけに、紙面や時間の制約があって、退職後のまとめは十分書けなかったのかもしれない。さらに「斎藤喜博の仕事と夢」（明治図書）の著者で、日本教育学会のラウンドテーブルで斎藤を取り上げてきた宮城教育大学の本間明信教授も、退職後の斎藤の活動についてはその著書では触れていない。

私がこの小論で書こうとしている内容は、斎藤と面識があり私よりはるかに彼を熟知し文献にも詳しいこれらの先人達が、まとめて取り上げていない公職引退後の斎藤の活動一特に学校行脚一を一括整理することである。以下項目ごとにその内容を、文献に聴き取りの結果を加えて論じることとする。

2．教育行脚

(1) 学校行脚

①学校行脚開始以前

斎藤の学校行脚に先立つ講演活動をまず取り上げてみたい。島小校長就任後（1952 年 4 月～）に限定すると、1952 年 8 月島村南部読書会で話をしたのを手始めに、県内教員組合関係の集会と学校、保育施設、婦人会等での講演活動が始まった。その範囲が隣接県に広がったのは意外に早く、1953 年 2 月島村に隣接する埼玉県本庄町友愛幼稚園の父母会で講演している。それから 6 年後の 1959 年に和歌山大学付属小と大阪府岸和田市立城内小での講演により全国区レベルの教育講演者になった。これには 1955 年から島小で始めた学校公開と 58 年に出版された「学校づくりの記」国土社刊の影響があったと思われる。

講演のスタイルも変わり始めた。単なる講演から、1960 年 7 月の宮城県岩沼小 PTA 講演会では、午前講演、午後授業を見た後、翌日授業検討会を持った。さらにその 2 日後、同県白石小 PTA 講

演会では講演終了後父母と教師約百名と座談会を開いている。退職後本格的に始まった学校行脚の原型が、すでにこの時期誕生している。こうして現職校長時代から全国の学校へ講演と指導に行くようになっていた。

②最初の学校行脚校―神戸市御影小学校

ところで校長退職の 2 年前、まだ境小校長在任中の 1967 年 1 月末、彼は神戸市御影小学校を訪れて授業を見学、その後批評した。私はこの時をもって斎藤の学校行脚の本格的始まりとしたい。その理由は、その後 8 年間、斎藤は毎年御影小学校に通って授業と行事の指導に当たり、その成果を学校公開または行事公開という形をとって世に問いかけたからである。これは内容・スタイルともに島小で始めた学校公開の行脚校版と言えよう。こうして御影小学校以後複数年かけて同一校を斎藤が指導する学校行脚と、御影小学校以前からあった一校一回限りの学校行脚に分かれることになった。そこでまず、前者のグループの代表格である御影小学校から学校行脚の話を進めることにする。

斎藤同様歌詠みであった御影小の氷上正校長は、1948 年以来斎藤の名前を知っていた[5)]。以来星霜 20 年、1966 年 12 月に発売された斎藤の著書「可能性に生きる」文藝春秋社を発売後即座に讀了、直ちに自作短歌二首を添えた手紙で自校研究会の指導を頼みこみ、12 月下旬には承諾の返書をもらっている[6)]。以来氷上校長退職まで 8 年間にわたって毎年斎藤の指導を受け、学校公開や公開音楽会を実現した。指導年数・日数ともに最も長い。後に続く 10 校の校長も、氷上校長同様、斎藤の招聘実現のためそれぞれ骨を折っている。

A.日程[7)] －8 年間の訪問 23 回、指導日数 40 日（前日の打ち合わせを含めると実質 60 日以上）

御影小学校日程一覧表

1967.1.30.授業見学と批評。1968.2.5.公開研究会、授業見学・講演。1969.2.4.公開研究会・講演。1969.5.15~17.授業・音楽・体育その他指導。1969.10.28.全クラス音楽指導。1969.12.5.音楽指導。1970.2.2~2.4.研究会・講演・座談会・授業見学・批評。1970.11.19~.20.公開研究会・講演。1970.12.7~8.合唱指導・批評会。1971.2.18~9.公開音楽会・授業見学・批評。1971.6.24~25.音楽指導・国語授業見学・研究会。1971.11.5.合唱指導。1971.12.5.音楽会。1972.2.10.研究会・特別授業。1972.6.12～13.音楽指導。1972.10.30~31.合唱指導。1972.11.28~30 .音楽会。1973.2.6.公開研究会。1973.6.13~15.合唱指導・参加者授業・研究会。1973.10.31~11.1.音楽指導・合唱指導。1973.11.13～14.授業見学・批評会／行進指導・合唱指導。1973.11.29.音楽会。1974.2.7.公開研究会。

毎回の日程は大抵 2～3 日。前日夕刻に神戸に着き、氷上校長他御影小の主要スタッフと打ち合わせと会食後、前泊するのが標準的日程。指導時間は普通 9 時～4 時であった。座談会などで 5 時以後延長戦に入ったり、夜の付き合いも時々あった。氷上校長は新大阪駅の初対面で、「薄よごれたボロボロの鞄をさげ、なんとなく疲れたような黄色い顔をしておられた。そのことが強烈に印象に

残っている [8]」と書いている。この印象は、後に斎藤の命を奪う肝臓の病に既におかされていたことを暗示している。

それから 4 年、1971 年年末から 72 年 2 月初めまで、斎藤は国立高崎病院に肝炎治療のため入院した。そして退院 1 週間目に早くも御影小に向かっている。年譜を読めば読むほど、このようにゆとりがない時間の使い方・生き方 [9] が、彼の持病を一層悪化させ死期を早めたように感じる。

B．指導内容と指導方法

日程にある授業見学と指導、批評、音楽指導、合唱指導、行進指導、公開研究会、音楽会、講演などは斎藤が島小と境小で開発・実践してきたことで、特に目新しい試みはしていない。ただ斎藤の性格から、過去のくり返しを淡々と教えたのではなく、一期一会の気持ちでその都度指導する子どもの実態に合わせて全力投球をしたに違いない。

御影小後半の指導になると、教授学研究の会のメンバーを中心に参加者が増え、林竹二（当初宮城教育大学学長、以下原則として林と表記）のように授業をする人まで現れた。この傾向は、御影小に続く学校行脚校になるほど増えている。その背景として、斎藤自身が、自分が中心になって作った「教授学研究の会」[10] の湯河原研究会で、「会員である教育研究者は、自分で授業に立ち向かう体験が必要ではないか」と指摘した [11] ことがあったのかもしれない。しかしその副作用として、迎える学校にとっては、多すぎる招かれざる参加者への対応は負担増になったことであろう。島小公開発表会の再現を、負担と感じる教員はどこの公立学校にもいるもの。授業力が劣る教員ほど自分の授業公開を嫌がる。斎藤の指導を自己啓発の好機と捉え、積極的に努力する教員ばかり公立学校の校長が揃えることはできない。さらに斎藤の指導内容が、国語を除くともっぱら音楽、合唱、体育、表現、団体行動などに時間が割かれているので、島小や境小でもあった進学実績への危惧が、大都市神戸の父母の間から起こっても不思議ではない。したがって氷上校長が退職すると抑えられていた不満や批判が噴き出す。こうして御影小も斎藤が去った後の島小のように普通の学校に戻らざるを得なかったのであろう。しかし斎藤を招いたことは決して無駄ではなかった。斎藤の考え方、教授法に触発された教員は御影小にしばらくは残るし、御影小を去っても神戸市内の学校へ散らばり、新しい学校で新しい種子を播いたからである。その一人、田村省三は、斎藤の追悼集 [12] に彼から学んだことを 4 ページにわたって書いている。その一部を引用すると、「斎藤先生から学んだことは、数限りない。恐らく教師としての私のすべてではないかと思うほどである。その数多くの先生の教えの中から、私にとって特に印象深く心に残っている幾つかをここに書きあげてみたいと思う。-----（中略）-----先生が音楽会の手入れに来て下さったときのことである。1 年生の女教師が担任する学級が荒れていた。-----（中略）-----私は子どもたちを叱り、なだめ、さとしたりしながら整列させようと必死になっていた。そこへ先生が入ってこられ、『そういうふうに子どもを型にはめてくくろうとしないで、ほうっておきなさい。教師がいいことをしてやれば、子どもたちはきっとその方向にむきます。------』と言われ、ほんの二、三人の子を対象として指導を始められた。二，三

分も経つと子どもたちの半数ぐらいは先生のところに集まって歌い始めた。さらに二,三分経つと、全員が背筋を伸ばし、先生の指導そのままに動き、楽しそうに歌い始めたのである。-------」 田村がこの文を書いたときは、神戸市立山手小学校教諭になっていた。

御影小を指導した8年間は、斎藤と御影小双方にとって恵まれた学校行脚だったように思う。彼は途中で一度入院したが、持病はまだ深刻ではなかったし、体力もあったであろう。また御影小では、校長職の責任と地元反斎藤派の中傷誹謗から解放され、環境・文化が全く異なる関西の大都市、風光明媚でモダンな港町神戸の小学校で、新鮮な印象を感じながら、リラックスした気持ちで指導に取り組めたことであろう。御影小にとっても他の行脚校より若かった斎藤に最も長く指導を受けることができた。こうして御影小での実践を手始めに、後に続く学校行脚校での斎藤の指導が広がっていった。

なお「第二期斎藤喜博全集第6巻」のP39～67に、斎藤が御影小で行った音楽の授業記録が復元掲載されている（注12参照）。

③学校行脚校Ⅱ―御影小を除く（2回以上指導した10校。斎藤が出講した大学の付属校などは除く）

該当する学校は 10 校ある。まず斎藤が指導に入った時期が早い順に日程を掲げるが、年月までとし指導日数を付け加えた。指導内容も御影小と重複するものは省略した。

A.日程

学校行脚校Ⅱの日程一覧表

③－1 大阪府貝塚市東小学校―9年間の訪問回数7回、指導日数12日

1977.11－1 日、1972.12－1 日、1975.12－2 日間、1977.4－2 日間－参加者授業介入、1977.12－2 日間、1978.2－2日間－参加者授業と介入[13]、1979.2－2日間－オペレッタ[14]。

③－2 広島県世羅町大田小学校―7年間の訪問回数15回、指導日数36日

1971.11－2 日間、1972.6－2 日間、1972.11－2 日間、1973.6－2 日間－職員合唱、1973.10－2 日間、1973.11－2日間、1974.5－3 日間―ステップ見学、1974.10－3 日間、1975.5－3 日間、1975.10－3 日間、1975.11－3 日間、1976.6－3 日間－オペレッタ見学、1976.10－2 日間―オペレッタ見学指導、1976.11－3 日間―舞踏・オペレッタ指導、1977.6－1 日－第一土曜の会。

③－3 北海道室蘭啓明高校―6年間の訪問回数12回、指導日数36日

1972.10－1 日、1973.10－3 日間、1974.5－7 日間、1974.9－3 日間―入場行進指導、1974.10－2 日間、1975.9－3日間、1976.6－3 日間、1976.9－2 日間、1976.10－3 日間、1977.6－3 日間介入授業・行進、1977.9－3 日間、1977.10－3 日間。

③－4 青森県十和田市三本木中学校－5年間の訪問回数5回、指導日数13日

1973.10－2 日間、1974.5－2 日間、1974.9－2 日間－理科・数学授業見学・入退場指導、1974.11－2 日間、1974.11－1 日、1975.5－2 日間、1975.9－2 日間―跳箱指導、1975.10－2 日間、1976.5－2 日間―木琴指導、1976.9－2

日間、1976.10－2 日間、1977.7－1 日。

③―5 石川県小松市東陵小学校―3 年間の訪問回数 10 回、指導日数 22 日

1975.6－2 日間、1975.12－2 日間、1976.2－2 日間―指導主事 3 名参加、1976.6～7－3 日間、1976.10－2 日間－側転・舞踏、1976.11－2 日間―舞踏指導・職員研究会、1977.2－2 日間－徒手体操、1977.6－2 日間、1977.10－2 日間、1977.10－3 日間―行進。

③－6 青森県十和田市七百中学校―4 年間の訪問回数 10 回、指導日数 17 日

1976.5－1 日、1976.9－1 日、1976.10－1 日ー舞踏、1977.7－2 日間、1977.10－2 日間、1978.2－2 日間、1978.6－2 日間―介入、1978.10－2 日間、1978.11－2 日間、1979.6－2 日間。

③－7 兵庫県宝塚市逆瀬台小学校―5 年間の訪問回数 13 回、指導日数 27 日

1977.5－1 日、1977.9－2 日間―リズム表現指導、1977.11－2 日間、1978.3－2 日間―幼稚園劇・理科算数授業、1978.4－2 日間、1978.7－2 日間、1978.9－2 日間、1978.11－1 日、1979.1－2 日間、1979.2－2 日間ー表現指導、1979.4－3 日間、1979.6－3 日間ー介入、1981.1－3 日間ー表現・介入。

③－8 広島県呉市鍋小学校ー4 年間の訪問回数 7 回、指導日数 22 日

1977.6－3 日間ー介入、1977.11－2 日間、1978.6－3 日間ー理科算数、1978.10－3 日間ー介入・指導主事 2 名、1978.12－2 日間、1979.6－3 日間、1980.12－4 日間。

③－9 長崎県森山町森山東小学校―2 年間の訪問回数 5 回、指導日数 14 日

1977.10－3 日間、1978.1－3 日間ー教育長見学、1978.5－3 日間ー理科・介入、1978.10－3 日間、1978.11－2 日間。

③―10 兵庫県姫路市四郷小学校ー3 年間の訪問回数 4 回、指導日数 10 日

1978.5～6－2 日間、1978.11－2 日間ー表現指導、1979.5－2 日間ー表現、1980.11－4 日間。

B．指導内容

指導内容は、大筋で御影小と変わっていない。公開研究会の開催と成果を目標に斎藤の指導を受けている。しかし変わった傾向もいくつか読み取れる。理科・数学の授業見学・指導が見られるようになった。ステップ・舞踊・オペレッタ・表現、介入なども御影小の年譜には見られなかった。教授学研究の会員の参加も目立って増加し、それとともに会員による授業が御影小より増えている。斎藤自身による授業も増えた。また教育委員会スタッフの見学、参加も記録され、斎藤の実践が地方教育行政の関心を集めてきたように思われる。

なお学校行脚Ⅱで挙げた学校で斎藤が行った授業の記録が、「第二期齊藤喜博全集第 4 巻」に、東陵小（国語）と室蘭啓明高校（体育）、第 5 巻に三本木中・室蘭啓明高校・東陵小・鍋小・七百中（いずれも国語）、第 6 巻に東陵小・七百中・貝塚東小（以上音楽）・鍋小（体育）が掲載されている。また宮城教育大付属小中校や学校行脚Ⅲ以下に名前が出てくる学校の授業記録も復元されているので参考になる。

C．斎藤の学校行脚の影響―評価の検証と地元の反感

すでに御影小のところで斎藤による学校行脚の効果を検証したが、御影小を除く10校の中から、指導された期間、訪問回数、指導日数ともに最長・最高だった広島県世羅町立大田小学校を事例として取り上げ、効果と終了後の継続性、そして地元の反応を検証する。恐らく他の学校でも程度の差こそあれ大差がないと、筆者は推量している。

事例―大田小学校

斎藤を招聘し7年間指導を受けた山口博人校長は、彼の編著「子どもを変える授業」一莖書房1975の冒頭で、「授業で子どもは変る」と題し次のように述べている。

「この7年間、私たち大田小の教師の脳裏から一時も離れることのなかったものは授業の質を高めるということであった。それは現在も同じであるし、また将来も私たちが教職に身をおく限り大きくのしかかってくる課題であろう。ある教師は20数年の教員生活のなかで、こんなにまで授業について本気に考えたことはないと述懐していた。大田小のすべての教師が、授業を質の高いものにするために苦悶し、わずかな成功感に酔ってみたり、失敗に打ちのめさりたりの重層をたどりながら歩んできた。中には授業の重さに耐えきれなくなって埋まってしまう者も何人かあった」。固有名詞と数値を除けば、この文はまさしく島小、境小の教師の記述とも取れる。授業を学校活動の中核に据えてきた斎藤の指導が徹底したようすが読み取れる。

ではこのような努力の結果、大田小はどのように変わっていったのだろうか。これについて、1972年11月の大田小第2回公開研究会に参加した当時広島県立三原工業高校国語科教諭山内宣治は、その時の体験を自著「私の校長奮闘記」一莖書房2000の中で次のように述べている。

「1年生の合唱で歌を歌い始める時、大きな口を開けて息を吸う。その息吸いの音が大勢の参加者の頭の上を飛び越えて、体育館の後ろにまで聞こえてくる。-----（中略）-----朝の学級会の合唱からずっと圧倒され続けの私は、もうすっかり小学校の子どもたちのとりこになってしまっていた」。

こうして彼は三原から28キロ中国山地に入った世羅に引越し、1年生の長男を大田小へ転校させ、自分は三原まで通勤する生活を選んだ。彼の著書（前掲）によれば転居は彼の子どもたちにとって正解だった。音楽はもちろん、水泳や国語力が如何に高められたか具体的に述べている。先生の子どもへの接し方にも感心している。そもそも彼が転居を決意した理由は、長男が通っていた三原市内の小学校の父親参観日の状況が大田小と比べてあまりにもひどかったからである[15)]。

山内が世羅に移って驚いたことは、地元住民の間に大田小を批判する人が多かったことである。「毎日歌や体育ばかりやっていて学力が低い。全国に公開し派手だが子どものしつけがなっていない。中学高校に進んでも学力が伸びない。子どもを校長の売名行為に利用している---------」と様々な非難・中傷が彼の耳にも直接入ってきたが、その多くは大田小以外の地元の教育関係者が発信源のようだと著書に書いている[16)]。これはまさしく島小の再現であり、教育界の嫉妬深い体質、良い点には目を瞑り問題点を増幅させて嫉妬心を満足させる体質、を反映しているように思うが如何なものだろうか。

大田小については後日談がある。1977 年 6 月の学校公開を最後に斎藤と山口校長が学校を去って 18 年たった 1995 年、山内は大田小校長に赴任した。そこで見た学校は、公開研究会を続けていることを除けば当時とすっかり変っていた。一日中ざわざわした騒音が続き、授業を見て回っても集中と活気がなく、級友の発表や発言を聞かず、遊んでいる子どももいた。一方教師集団も単元学習を錦の御旗にしながらそれにとらわれ主体的に考えられなかった。教員集団により学校が運営され、「斎藤教育は古い。新校長がそれを持ち出したら抵抗する」という教師が多かった [17)]。山内がその状態を軌道修正し学校を再生させた苦心談はここでは省略するが [18)]、大田小と同じような変化は斎藤が指導した他の学校でも大なり小なり起こったことであろう。しかし同時に触発された人材も生んだことも忘れてはいけない [19)]。

公立学校では「校長がかわれば学校は変わる」。昨今教育委員会の管理指導が強化されたこともあって、指示通りにそつなく大過なく、しかし挑戦もしないできないという校長が昨今増えているそうである。筆者は、改革の継続は教育行政の人事に負うところが大きいと思っている。

④学校行脚校Ⅲ―原則一回限りの行脚対象校（境小退職後訪問校に限る）

掲載校は、学校の子ども、教員、ＰＴＡ会員のために講演、座談会、授業見学、授業指導、研究会をした学校であって、広域の教員団体、管理職団体、教員組合関係の会合などに使用された学校は含まない。大学付属校とそれに準ずる学校も大学行脚の方に回してある。また例外として、三輪小、田熊中、志里中は 2 回ずつ指導に入っている。斎藤は 1969 年から 81 年死去までの 13 年間に 43 校を訪問している。しかし大学と定期的学校行脚校での仕事が増加した 1975 年以後は急減、健康悪化も影響して 1979 年 6 月下旬の中京女子大付属高校が最後になった。そして 7 月都留文科大学の集中講義から帰ると再度入院を指示され、8 月 2 日に国立高崎病院に入院した。彼は限界を超えてまで教え続けたのである。以下に学校行脚校Ⅲの学校名を年ごとに示す。

学校行脚校Ⅲ一覧表

1969 年：明石市鳥羽小、島根県木次中、岐阜県中津川一中、大阪府郡津小、香川県塩江町小中 4 校

1970 年：千葉県立国府台高校、埼玉県立川口工業高校、黒石市六郷小、浦和市西浦和小、枚方市牧野小、盛岡市厨川中、因島市田熊小

1971 年：帯広市小、盛岡市河南中、戸田市第二小、茨城県西郷小、旭川市大有小、三田市三輪小、因島市田熊小

1972 年：宝塚市第一小・長尾中、札幌市東白石中、三田市三輪小、名古屋市しまだ小、安芸市伊尾木小

1973 年：鳥取県村岡小・鬼塚小、三田市三輪小、宝塚市売布小・宝塚中

1974 年：北海道静内小・高静内小、宮城県松山中　　1975 年：那覇市久茂地小

1976 年：東京都正則高校

1977 年：岩手県向中野高校、神戸市志里池小・和田岬小・湊川高校

1979 年：中京女子大付属高校

(2) 学校行脚以外の教育行脚―境小退職後学校以外を対象とした講演、座談会、研修会等

殆ど講演会であるが一部に座談会が含まれる。主な対象は、全国各地の教職員会、校長会，教頭会、教育会、ＰＴＡ，各種研究会、看護・保育団体、地教委、教育研究所、地方自治体、厚生省、大学祭、夏季大学などである。紙面の制約から個々の講演先は省略する。講演回数は、13 年間で 58 回に達する。学校行脚校や大学への出講が増えてきた 1972 年以後急減、1977 年から皆無になった。健康悪化も影響したと考えられる。

(3) 教育行脚の総まとめ一島小校長就任（1952）から死去（1981）まで

斎藤が島小校長に就任してから境小を退職するまでの 17 年間に講演、座談会、学校授業指導などをした回数を年譜から拾って合計すると、概算 142 回、1 年間に 9 回弱になる。

この結果に、これまで②、③、④、⑤と（2）で明らかにしてきた斎藤の退職後の行脚先と回数を加えた最終結果を、都道府県別に集計し、多い順に掲げたものが次の一覧表である。但し②、③に掲げた何回にもわたって指導した御影小など 11 校については、各校ごとに訪問回数（指導日数ではない）を所在する道府県に加えてある。

都道府県別行脚先延訪問回数一覧表

兵庫 57、群馬 32、北海道 24、広島 22、青森 21、大阪 18、東京 14、石川 12、埼玉 11、長崎・愛知 9、宮城・茨城 8、熊本 7、岩手・高知 6、秋田・新潟・岐阜 5、山形・千葉・長野・静岡・山梨・三重・京都・鳥取・香川・福岡 4、富山・和歌山・奈良 3、神奈川・岡山・大分・佐賀・沖縄 2、栃木・福井・島根・徳島 1、福島・愛媛・宮崎・鹿児島 0

以上の結果を概観すると、関西の神戸市とその衛星都市および大阪の衛星都市が、斎藤の手法導入に最も熱心に取り組んでいることが分かる。兵庫の場合は御影小効果も周辺に波及したことであろう。反対に、南関東大都市圏の中心である東京と神奈川が、人口が多い割に斎藤の学校づくりや教授法への関心が低い。東京は大阪より若干少ない程度であるが、公教育関係では、台東区教育研究会、国分寺市教育委員会、大島の三件にすぎず、大半を占めるのは、大学学園祭、裕福な子弟が通う私学、厚生省主催の保健婦・助産婦専任教員研修会、保育園と看護関係、朝日新聞主催女性対象セミナーなどである。

確かに斎藤の周辺には、教育界・学会・文化人サークルのいわゆる進歩派が多かったし、斎藤自身も校長就任後も日教組に留まり、組合が繰り返すスト指令に従って授業を放棄する配下の教員たちの行動を是認してきた。私は斎藤のこのような姿勢に反対で、私の校長時代にもスト参加をしながら都教委に報告するなという組合の要求を認めなかった。しかし斎藤の卓越した授業力と指導力、そして達成した学校改革の成果には学ぶべき点が多いと高く評価している。政治姿勢に反対でも、学ぶべき点は吸収する姿勢が、当時の東京や神奈川の教育関係者にも欲しかったと思う。

３．現在も引き継がれている斎藤の遺産継続活動の事例

2011 年 7 月は、斎藤が逝去して丁度 30 年になる。目減りしつつあるが、彼の遺産は、まだ日本各地で引き継がれている。保育園や小学校の公開研究会、教員の授業力を磨く合宿研究会、手入れの仕方を教わる会などが開かれ、中には毎年定期的に開催されているものもある。斎藤の長女である斎藤草子さんが出し続けている月刊誌「事実と創造」に掲載されている開催案内を、この 5 年間に限って紹介すると、下記の通りである。これ以外にも、全国各地で同様の実践をしている人々や団体の存在は、十分考えられる。

斎藤の遺産を継承する公開研究会等と活動内容一覧表

「公開研究集会」　西多摩授業の会・ちびっこの会共催：　実践検討・自由発表他（2006・08 年開催）

「公開保育研究会」　美濃市美濃保育園：　歌・ステップ・リズム・表現・体育・オペレッタ（毎年開催）

「公開研究協議会」　秋田大学付属小：　全体会・提案授業・分科会・講演（2006・08・10 年開催）

「手入れの仕方を教わる会 」　群馬教授学研究の会他主催」（毎年開催）

「授業を学ぶ・春の合宿研究会」　千葉・茨城教授学研究の会：実践報告・合唱練習・ステップ方言練習・（毎年開催）

「授業を学ぶ・夏の合宿研究会」　千葉県九十九里町：実践検討・合唱と体育の実技指導・ステップと表現の実技・表現の教材研究・国語模擬授業等（毎年開催）

「公開研究集会・斎藤喜博の授業論に学ぶ」　授業研究の会 愛知県東浦町：実践報告・教材解釈・実習（合唱・表現・図工・体育）・実習サポート他（毎年開催）

「公開研究会」　青梅市立若草小学校：授業公開・表現活動発表・全体会（2007 開催）

「公開研究発表会」　別府大学明星小学校：授業公開・表現活動発表・全体会（2007 年開催）

「生活画を考える会」山梨生活画を考える会他主催　山梨県中央市（2007 年開催）

「美術教育研究集会」　美術教育者協議会主催 大阪市（2007 年開催）

「校内研修公開」　石岡市立柿岡中学校：公開授業・提案授業・視聴覚等による研究協議会（2007 年開催）

「授業を学ぶ冬の合宿」千葉・茨城教授学研究の会　千葉県九十九里町：実践検討・表現研究・合唱・指揮練習・ステップ・表現練習・体育実技・講座—斎藤先生から学んだこと（毎年開催）

「学校公開研究会」那覇市立宇栄原小学校：公開授業・オペレッタ・合唱・器械体操・全体会（2008・09 年開催）

「学校公開研究会」　浜松市立光明小学校　：公開授業・オペレッタ・合唱・器械体操・全体会（2008 年開催）

「公開研究会」青梅市立友田小学校：授業公開・体育発表・表現発表・全校合唱・全体会（毎年開催）

「国語教育研究発表会」　三田市立すずかけ台小学校：提案授業・研究報告・講演会（2010 年開催）

以上掲げた研究会等で行われている内容の大部分は、斎藤が島小、境小、そして退職後学校行脚のなかで教えてきた手法に基づいている。この資料から、斎藤が残した遺産を現在継続している指導者たちの名前をあげると、宮坂義彦（元三重大学教授）、横須賀薫（前掲）、大槻志津江（元境小

教諭)、高橋元彦（元境小教諭)、川嶋環（元島小教諭)、白銀一彦（元日本女子大学教授)、戸田淳子（元長野県伊那市小学校長)、野村新（元大分大学学長）など斎藤と直接接し、その手法や考え方を学んだり触発された人々である。しかしこれら指導者の高齢化が進むことは避けられず、そろそろ孫弟子が登場しないと遺産継承がさらに先細りする。ただ「千葉・茨城教授学研究の会の合宿研究会」のように、斎藤の直弟子ではない若い人々が中心になっている企画もあり、将来に期待したい。

上記の公開研究会の中で、私が発表会を見学したのは、那覇市立宇栄原小、浜松市立光明小、青梅市立友田小、そして岐阜県美濃市の美濃保育園である。いずれの学校でも子どもたちの発表は立派であったと感じた[20)]。ただ残念なことに、この子どもたちが、次の段階に進むと大抵の場合獲得した成果は継続されない。美濃保育園の年長組のオペレッタの演技は、小学校上級生のそれにそれほど遜色がないように私には見えたが、美濃市の小学校では、教員の負担が大きくなることもあってか、全く継承されないという話を雲山文夫園長から聞かされた。同様なことは、近隣の小学校間でもいえる。「切磋琢磨は日本の学校では敬遠される。企業なら成果を真似し、盗み、改善し、追い越そうとするのに--------」とは、企業出身の前杉並区立和田中校長藤原和博から直接聞いた言葉である。日本の学校教育が改めるべき課題である。

４．大学への出講（教員養成と教師教育への挑戦）ー広義の教育行脚に含められる

この項目については､斎藤が出講した当時の事情を知る各大学の関係者はまだ相当数健在である。一方筆者は彼の大学での活動を見ていないし紙面の制約もある。そこでここでは、年譜から出講順に、各大学の出講日、授業時間、指導内容を整理したものを表示し、次いで他の文献の内容を総合して、筆者の概括的なまとめを提示するに留めた。なお③．宮城教育大学の部分は、専任教授の期間があるため他大学に比べ年譜がかなり長くなるので、筆者の判断で他大学より指導内容を簡略にし、他大学と重複する活動内容は削除することにした。

(1) 出講した大学の講義日時・講義時間と講義内容一覧表

①佐賀大学

1970.9.9~10 :9 時~3 時講義。70.10.9:午前代用付属（以下省略）本庄小で体育音楽の授業を学生に説明、午後大学付属小で講演（学生参加)、70.10.10 : 9~12 時講義。71.10.9 : 9 時~2 時半講義、71.10.10 : 9 時~1 時講義。72.2.29 : 9 時~4 時講義、72.3.1: 午前本庄小で学生模擬授業・斎藤授業・午後 3 時半まで講義。72.10.9 : 9 時~4 時講義、72.10.10 : 9 時~ 3 時半講義・学生に合唱指導。73.3.4 : 9 時から講義。73.3.5 : 付属本庄小で授業、午後学生模擬授業、斎藤・佐賀大副島教授授業、4 時から本庄小教員と話し合い。夜佐賀大・本庄小教員と会食、73.3.6 : 最終講義 9 時~12 時。

②岡山大学

1971.11.21 : 9 時~4 時講義後座談会。71.11.22 : 9 時～4 時講義後学生と座談会～9 時半まで。71.11.23 : 9 時～4

時講義。71.11.24：9 時～12 時講義、午後レポート。78.7.11：9 時～5 時 20 分講義。78.7.12：9 時～2 時半講義・ゼミ。78.9. 10：9 時～5 時集中講義。78.9.11：9 時～11 時半講義、午後学生授業介入と分析、教材研究。78.9.12：9 時～12 時半「利根川」表現、詩朗読等。

③宮城教育大学

1972.7.12~14：付属小で音楽、体育指導を学生に見せ講義。73.7.7～11：付属小中、本町通小で合唱・国語・体育の授業指導、学生に講義。1974.8～75.3：宮城教育大学教授。74.9,21：授業分析センター運営委員会。74.9.28：横須賀研究室で第四土曜の会[21]（3 時半～7 時）。74.10.18～19：学生・教員と松山中の授業参観と音楽指導、大学でゼミ・俳句・合唱指導。74.10.25～28：講義・運営委員会・研究会議・合唱指導・教材研究・ゼミ・第四土曜の会。74.11. 1～2：講義、付属小で国語授業（ゼミ学生参加））、授業研究、午後合唱指導。74.11.8～9：講義・学生と付属中で国語授業見学、付属小で合唱と行進指導・研究会。 74.11.22：講義・付属校　74.11.28～30：付属小で林学長の授業見学、講義・分析センターで研究会議・学校論現職講座。74.12.5~7：付属小で国語授業・ゼミ・体育音楽授業あと説明。74.12.12～14：付属小授業見学あと批評・職員合唱指導・ゼミ。74.12.19～21：講義・付属中で国語授業・卓球指導。1975.1.17～18：講義・センターでゼミ。75.1.24~25 ：講義・センター研究会議・付属中国語授業・音楽指導・批評会・第四土曜の会。75.2.1：講義・朗読法・音楽指導・批評会。75.2.7~8:：講義・合唱指導・ゼミ・批評会・合唱指揮指導。75.2.14～15：講義・合唱指導・演習。75.2.21～22：研究会議・付属小国語授業・体育・第四土曜の会。75.3.1：授業見学・批評会・ゼミ。75.3.7～8：講義・音楽体育指導・林学長の授業見学。75.3.18~20 ：卒業生歓送会・大学幹部招宴・送別会。75.5.23~25 ：分析センター落成式・教授学ゼミ・合唱指導・授業放映分析・第四土曜の会。75.9.27：教授学ゼミ・国語教材研究・体育合唱指導・第四土曜の会。75.10.24～25：学生を連れ松山中で国語授業・体育指導・批評会、付属小で国語授業・ゼミ。合唱・跳箱・第四土曜の会。75.11.22：ゼミ・短歌批評・体育・合唱・第四土曜の会。1976.1.24：教授学ゼミ・詩の朗読・合唱指導。76.2.28：ゼミ・オペレッタ指導・第四土曜の会。76.9.25～26：教授学ゼミ・第四土曜の会。76.10.23：ゼミ・第四土曜の会。76.11.27：ゼミ・第四土曜の会。1977.1.29：教授学ゼミ・第四土曜の会。77.6.13~15 ：教授学ゼミ・午後合唱指導、14 日～15 日ゼミ。77.12.12～14：教授学ゼミ・教材分析・「利根川」指導・付属小国語とオペレッタ指導・授業介入。

④和歌山大学

1973.10.18～19:9 時 10 分~2 時 40 分講義、10.20：9 時 10 分～2 時 5 分講義。73.12.21：9 時~3 時講義、12.22：9 時~正午講義。

⑤大分大学

1976.12.20：9 時~4 時ゼミ、12.21：9 時~4 時半ゼミ、12.22：9 時~12 時半ゼミ

⑥.都留文科大学

1977.7.7：午前講義、午後スライド・合唱、7.8：午前講義・写真、午後体育開脚跳び・行進・合唱、7.9：午前講義、午後表現・行進・合唱・体育台上前回り、7.10：9 時～3 時半講義。77.1221：午前講義、午後合唱、12.22：午前講義・テープ、午後合唱・ジェスチャー・行進、12.23：午前講義、午後 3 時まで合唱。78.8.29：午前教授学研究の会会員授業・介入、午後「利根川」指導 4 時まで、8.30：午前ゼミ学生の質問時間・合唱・跳箱・行進、午

後「利根川」3 時半まで。1979.7.9&7.10 : 9 時～4 時半集中講義、7.11 : 9 時~5 時集中講義、7.12 : 9 時~3 時半集中講義。

⑵ 斎藤の大学出講を考える

前掲の一覧表で提示した大学出講の資料から、斎藤が当時としては型破りの教師養成手法を取ったことが読み取れる。座学と実技、そして付属校に頼る教育実習でよしとする教師が多かった中で、造詣が深い国語だけでなく、音楽、美術、体育、表現など実に幅広い分野まで付属校を最大限に活用し指導する彼の手法は、上記の大学別一覧表から明らかである。

斎藤自身、「単に一方的に授業をするだけではなく、-----（中略）-----講義をもとにしながら、具体的な授業とか教材とか写真とかテープとかの事実を対象にして考えるということを多くした。また、合唱や、跳箱運動・マット運動、表現、その他の実技を多くした」と自著の中で書いている[22]。

斎藤の、このような教え方と卓越した匠の技で、「直接指導された学生たちの受けた恩恵はもとより、日本の教師教育にとっても画期的な出来事であった[23]」と横須賀は述べている。それまで他の多くの教員養成大学で行われてこなかったのは、できなかったからであろう。斎藤のように、優れた実績を持ち、卓越した授業力を備えた教師は、大学では稀であったのだろう。そしてその背景には大学教員の採用の規準と方法、そして教員を選考する大学教員自身の資格と資質に問題があったからであろう。

もちろんこの問題に気づいていた大学人はいた。しかし極めて少数でだった。境小退職後の斎藤を真っ先に非常勤講師に迎えたのは佐賀大学の副島羊吉郎である　彼は付属小学校長の時、付属校と大学双方の授業に物足りなさを感し、斎藤を非常勤講師に採用する案を教授会に提案したが、教授会の承認を得るまで随分難航したそうである[24]。教職大学院で実務者教員採用が必要条件となっている今日とは天地の差、斎藤が現在生きていればと惜しまれる。こうして始まった斎藤の講座名である「授業心理」の授業効果は大きかった。聴講した学生の異常な眼の輝きや、集中講義を異口同音に高く評価する学生の声から、斎藤を招聘した効果はあったと副島は判断している。ただ副島の定年退職後は、この特別講座の推進役がいなくなり、4 年で打ち切られ残念だったと手記を結んでいる。

したがって、斎藤を招聘した 6 大学の中で、定年まで 8 カ月という短期間ではあったが唯一専任大学教授に登用した宮城教育大学の人事は、まさしく異例であった。同大学に新しく設置された授業分析センターの初代教授として迎えたわけであるが、その陰には、当時の学長、林竹二の並々ならぬ決意[25]と努力、その意を体して教授選考委員会の主査を務めた横須賀薫の働き[26]があった。そして斎藤はその期待に十分応え、センターの基礎づくりをしたわけである。

５．第三日曜の会

校長退職後の斎藤にとって第三の教育への貢献は、自宅を開放し、原則として 1 月と 8 月を除いた毎月第三日曜日の午後に開いた勉強会である。会費の類は受け取っていない。全国各地から研究者[27]、向上心旺盛な現場の教師、そして学生等が、自分たちの実践を斎藤の前で説明し、彼に指摘されたことを参考になお一層の授業力向上を図る会であった。当然自分以外の参加者に対する斎藤のコメントは、自分自身にとっても役に立つ。最後までこの会の常連の一人であった馬場信房（元都立小石川高校長、教授学研究の会会員）は、筆者の質問に「斎藤のすばやく簡潔な指摘は説得力があった。だからこそ大勢の人が、日曜日を返上し、手弁当でくり返し斎藤の意見を求めに集まったのだろう」と答えている。また斎藤の一番弟子の武田常夫は、自著「斎藤喜博抄」筑摩書房 1989 の中で第三日曜の会に触れ（Ｐ241~242)「レポートを出し、レポートについて説明すればあとは斎藤先生の出番だ。大部分の人は殆ど黙っている。斎藤先生の言葉を一言も聞きもらすまいと必死なのだ。ときには先生から指名されるときもある。指名された人は、うわごとのようなこと（本人がそう思っている）を二言三言いう。あたっていればいいけれど、はずれる場合もある。そんなときその人の表情は見られたものではない」と書いている。その場の緊張した雰囲気が伝わってくる。それでもリピーターが押し掛けた秘密は、前に紹介した馬場の言葉に尽きるのかもしれない。

当初は参加者が少なく 10 名の日もあったが、次第に増え一時は 60 人前後に達した。その後安定して毎回 30~40 人前後で推移し、1980 年 10 月 19 日，死の 9 カ月前で終わっている。それにしても会の裏方として参加者に何くれと気配りした彼の妻文代の内助の功なしでは[28]、この会のスムーズな運営は難しかったろう。その彼女も、斎藤の死 1 年後に、夫の後を追うようにこの世を去った。まだ 64 歳の若さだった。二人の墓は斎藤の生家のそば、群馬県佐波郡玉村町川井にある。

以下に年譜から、毎回の記録を要約（記載されている参加者氏名は省略）したものと、筆者が作成した統計を資料として掲げておく。

実施期間：1967.11~1980.10. の 14 年間、実施回数：93 回、参加延人数[29]：約 3500 名、1 回平均約 38 名参加

実施日と参加人数一覧表（人数の単位名は省略）

1967.11.19：20、12.17：10、1968.1.21：13、2.18：14. 3.21：15、4.19：15、5.21：21、6.16：18、7.21：21、9.15：22、10.20：10、11.17：20、12.15：10、1969.2.16：15、3.16：27、4.20：20、6.15：25、7.20：20、9.21：30、10.19：27、11.16：20、12.28：28、1970.1.18：23、2.15：23、5.17：26、6.21：18、7.19：28，9.20：33、11.15：22、12.20：29、1971.2.21：26、3.21：20、5.16：31、6.20：31、7.16：24、9.19：40、10.16：23、12.19：45、1972.4.16：20、5.21：30、6.18：31、7.16：28、9.17：22、10.15：30、11.19：49、1973.2.18：65、3.18：44、4.15：50 数名、5.20：45、6.17：60 数名、7.15：50 数名、9.16：60、10.21：45、11.18：27、12.16：35、1974.2.17：39、3.17：23、4.21：30、5.19：36、6.16：38、7.21：約 40、9.16：30 数名、11.17：43、12.15：40 1975.2.16：40、3.16：30 数名、5.18：48、6.15：50、7.20：40、9.21：36、10.19：36、11.16：30、12.21：30、1976.2.15：44、3.21：36、4.18：約 40、5.16：33、6.20：35、7.18：30、9.19：38、10.17：40、11.21：30、1977.2.20：

40 数名、5.15 : 36、6.19 : NHK 撮影、7.17 : 36、9.18 : NHK 撮影、10.16 : 35、11.20 : 40NHK3 名、1978.3.19 : 40 数名、5.21 : 35、6.18 : 30 数名、7.16 : 30 数名、9.17 : 40 名、10.15 : 37、11.19 : 38、1979.2.18 : 38、3.18 : 38、4.15 : 39、5.20 : 40、6.17 : 約 40、7.15 : 40、8.2〜11.21 : 国立高崎病院特別室入院 1980.5.18 : 52、10.19 : 40 数名。

6．教授学研究の会

(1) 教授学研究の会の起こりと開催状況

斎藤は、島小校長就任 2 年目（1953）から島村総合教育事業を通じて東大教育学部の宮原誠一[30)]、勝田守一、大田尭らと知己になり、以後教育科学研究会（略称教科研）にも関係するようになった。1954 年 3 月には教科研委員会、同年 10 月には教科研全国委員会、翌 55 年 7 月には同世話人会に出席するようになり、学会活動を本格化した。横須賀によれば[31)]、教授学構築の構想は 1960 年前後からであり、斎藤はその提唱者の一人として、1965 年の「教科研教授学部会」（分科会）創設にあたって中心的役割を果たした。

1969 年校長退職後も、教科研と同教授学部会での活動は続いたが、1973 年教授学部会から「教授学研究の会」への移行が斎藤主導のもとで実現した[32)]。 これに先立って、斎藤は教科研常任委員辞任通知を郵送、その後斎藤の学会活動の場は、「教授学研究の会」へ移った。全国規模の会開催（世話人会等除く）は次の通りである。

教授学研究の会開催一覧（1973~80）

第 1 回教授学研究の会 : 1973.12.25~27. 山梨県石和 80 名参加。　第 1 回夏の研究大会 : 1974.8.7~9. 淡路島洲本 500 数十名参加。　冬の合宿研究会 : 1974.12.25~27.湯河原 30 名参加。　春の合宿研究会 : 1975.4.1~3.伊良子岬 140 名参加。　夏の公開研究大会 : 1975.8.4~6.鳥取県皆生温泉。　冬の宿泊研究会 : 1975.12.23~25.目黒雅叙園 150 名参加。研究者研究会 : 1976.4.11~12.目黒雅叙園。　夏の公開研究大会 : 1976.7.30~8.1.十和田湖 700 名参加。　冬の合宿研究会 : 1976.12.26~28.湯が島。　1 日研究会 : 1977.2.12.神戸 250 名参加。　夏の研究大会 : 1977.8.3~5.片山津温泉。冬の合宿研究会 : 1977.12.25~27.湯が島 150 名参加。　1 日研究会 : 1978.2.26.神戸。　夏の公開研究大会 : 1978.8.　2~4.洞爺湖。　冬の合宿研究会 : 1978.12.25~27.湯が島 140 名参加。　1 日研究会 : 1979.6.3.名古屋即武小。夏の大会 : 1980.8.6~8 雲仙。　冬の合宿 : 1980.12.26~28 : 伊香保 190 数名参加。

筆者は教授学研究の会に出席したことはなく、教授学の活動にも疎いので、研究会での斎藤の活動や研究会の成果と課題に踏み込むことは差し控える。ただ研究会開催資料を見る限り、彼が念願としてきた大学の研究者と教育現場の実践者の交流を全国規模で実現した研究会であったことが読み取れ、斎藤の成果に加えても良い活動であったと考える。但し会が齊藤のワンマン運営という批判もあった[33)]。

残念なことに、彼の病状は悪化し、1980 年雲仙の夏の大会では、会員の宮坂義彦、白銀一彦に往復付き添ってもらっている。また最後になった伊香保の冬の合宿でも、島小・境小で一緒に働いた岡芹忍の車で往復、2 日目は午後早帰りしている。このあたりの年譜を読むと悲壮感を感じるのは筆者だけであろうか。

⑵ 斎藤喜博と林竹二の別れ

1977 年夏、片山津で開催された「授業学研究の会夏の研究大会」で行なった講演を最後に、林竹二は授業学研究の会から去った。横須賀によれば、林と斎藤の別れを契機に約半数の研究者がこの会から離れたそうである。筆者はこの件について関係者の文献全てに目を通したわけではないが、1970 年の二人の出会いから、二人の蜜月時期を経て 1977 年夏の別れまで、両者の間にあって最もその間の事情を知っている横須賀の解説 [34)]―やや明快さを欠くが、恐らく最も穏当で公平な解説、二人の心情を理解し双方を傷つけないよう気配りした解説―と年譜を読んで、二人の別離の大筋を理解することができた。これから述べることは、二人に面識がない筆者が、横須賀の文と直接聞いた話を縦糸に年譜と筆者の推理、それに「第 2 期斎藤喜博全集第 6 巻」P342~384 に記録された齊藤の湊川での授業の記録を横糸にして織り上げたものである。

林竹二は宮城教育大学長（1969~75）になってから齊藤の実践を知って触発され、小中学校で出前授業を始めた [35)]。斎藤の宮教大での授業を見学し、斎藤に授業を見てもらい、さらに斎藤の学校行脚先で彼の授業を見､林自身授業をし､またそれ以外の学校でも別個に出前授業を始めている(｢第二期斎藤喜博全集第 12 巻」掲載年譜と林竹二「授業　人間について」国土社 1990 序文冒頭参照)。しかし少なくとも小中学校での授業の技や幅 [36)] で斎藤に到底追いつけないことは分かったはずである。そのようなとき、いわゆる底辺校や大方の定時制高校よりはるかに厳しい課題―同和や在日外国人問題など―を抱えた神戸の湊川高校定時制で、1977 年 2 月から授業を始めることになった。ここは斎藤が全く経験したことがない異質の現場である。林の「人間とは何か」を主題にした授業は、生徒たちの心を揺さぶった [37)]。そこで同年 4 月 24~26 日斎藤を誘って湊川高校で音楽・体育の授業をしてもらった。ところが斎藤の体育と音楽の授業に対する生徒たちの態度は、彼が経験したことがないほど悪かった [38)] ようである。生徒たちは、授業に集中するどころか、斎藤の指導になかなか従わず、騒いだり、私語をやめようとしなかった。齊藤の自尊心は著しく傷つけられた。このような斎藤の心理に気づかなかった林は、湊川から帰って間もなく（5 月 2 日）齊藤に 2 回電話をしている。電話の内容は年譜からはわからない。ただそれまで頻繁だった二人の接触は、夏の大会までぱったり途絶えている。恐らく林は、斎藤に、湊川で一緒に指導しないかと誘い説得を試みたが、斎藤は 2 回にわたる要請を拒んだのであろう。表面的には授業嫌いの湊川の生徒たちにも良さを見出し、恵まれない彼らを指導することに意義と情熱を持った林の教育観と、指導に集中しない彼らの態度に愛想を尽かした斎藤の教育観の違いと､二人の授業に対する湊川の生徒の反応の差が､二人を別れさせたように思う。したがって、後に林が唱えた斎藤調教師論は、このような経緯から

生まれた理屈であって、斎藤の優れた実践を林が否定したわけではないだろう。

筆者も低学力で勉強嫌いが多かった定時制高校で教え、最初カルチャーショックを感じたことがあるので、斎藤の気持ちもある程度分かる。一方林のように人間とは何かという大きなテーマを、逆境に生きる生徒たちに投げかけ、彼らの気持ちを癒しながら教科書から離れて考えさせる林の授業の方が[39]、理詰めに技や知を教えこもうとする斎藤の教え方より湊川の生徒たちを授業に惹きつけた背景も分かる。しかし林は教師や記録係りを従えた権威ある客人として授業をしたのであって、教室で孤軍奮闘せざるを得ない常勤の定時制教員の参考にはそれほどならない。まして林の考え方や教え方を大多数を占める義務教育の学校で活かす方策は一朝一夕には得がたい。教師たちは人間とは何かというテーマだけ扱うわけにはいかないのである。筆者は林の湊川での実践は高く評価するが、その一方で齊藤よりはるかに短期間ではるかに授業内容が偏った実践の成果に酔い、斎藤の理解と協力を性急に求めすぎた感がする。

一方斎藤も、大学学長経験者が退職後小中学校だけでなく、乞われて超困難校の湊川定時制に飛び込んで教えるという稀有な情熱に応え、湊川で一緒に教える誘いにのるか、少なくとも林の教え方の長所を十分評価したうえで、多忙と健康のため一緒にできない事情を柔らかく話し、側面から援助する旨話せばよかったと思う。しかし斎藤は、問題を抱えた湊川の生徒たちを理解し救いの手を差し伸べるには、それまでの活動範囲が狭く、柔軟な思考と生徒たちに対する思いやりの心にも欠けていた。何よりも、自他共に認められてきた授業名人というプライドが、湊川の生徒たちに傷つけられたことで、彼らを許せなかったのかもしれない。斎藤の心の狭さと限界を垣間見た感がじたしだいである。ただ仮に斎藤が豊かな包容力と使命感で湊川の生徒たちを導きたいと考えたとしても、健康が悪化する一方で、過密な学校行脚と大学での教員養成の仕事を抱える斎藤が、新しい困難な仕事を引き受ける余力があったか疑問である。その点で湊川の件を斎藤に持ちこんだ林も気配りが足りなかったように思う。

いずれにせよ、二人とも強烈な個性の持ち主で独創的な改革を追い求めた人物。斎藤を大方の反対を押し切って教授就任を実現させたのも林であるし、斎藤もその知遇に応えたかったはず。それだけに、このような別れ方は、二人のためにも、そして教育界のためにも残念なことであった。

７．終わりに

私は、校長の経験があるということから、本学が発足した５年前から「学校経営事例研究」という授業を持っている。自分の実践だけ話しても内容が偏る。また学校経営に実績がない教育学者や行政官庁幹部の学校経営論が私の学校改革に役に立ったことはあまりない。そこで以前「授業入門」などの本を読んでなるほどと感心した斎藤を講義で取り上げることにした。しかし実践記録を中心にした膨大な文献の存在を知るにつれ、戦後教育界に登場した天才的教育者を深く知った喜びと同時に、自分の力量不足からくる後悔もあった。それでも筆者の小論も斎藤の文献リストの作成（ま

だ不十分）に始まり、島小、境小と進んで、やっと今回退職後に辿り着いた。島小のところでは校長としての斎藤に対して批判と異論も書いた。またこれまでにたくさんの人との出会いがあり、いろいろと教えて頂いた。それなりに関係する本も読んだが、それは膨大な文献のまだ一部に過ぎないことは自覚している。この小論でも悔いが残る。そして今わかったことは、斎藤が、晩年に至るまで全力投球で教師と子どもたちに教え続けた類まれな情熱の持ち主であったことである。彼は人生の教師でもあった。ただしこの小論も若干指摘しているが、人間である以上彼にも短所も限界もある。そこは冷静に指摘し反面教師にしないといけない。しかし長所と業績、短所と失点を整理し並べるだけでは評論家で終わる。もちろん崇めるだけでもいけない。定性的分析であっても、斎藤の教育界での収支決算をはっきりさせ、それが明らかに大幅な黒字であることを認識しなければならない。学校行脚の結果だけでも失点をはるかにカヴァーしている。今後はこのような視点に立ち、紙面の制約が大きい論文ではなく、斎藤の生涯にわたる活動を、今まで書けなかったことも含めて、もっと自由にまとめてみたい。彼にはまだ賞味期限はない。教育学研究者ではない筆者の不完全な小論に、お気づきの点をご教示いただければ幸いである。

謝辞

最後に、斎藤について、過密日程を割いて様々な角度から有益な御教示を賜った十文字女子大学の横須賀薫学長代行（元宮城教育大学学長）と、対面または電話で聴き取りにご協力頂き種々教えて下さったり、資料や文献を頂戴した斎藤草子（一莖書房）、馬場信房（元都立小石川高校長）、大槻志津江（元境小教諭）、高橋元彦（元境小教諭）、岡芹忍（元島小・境小教諭）、雲山文夫（岐阜県美濃市美濃保育園長）の方々に、心から御礼申し上げる次第である。また身内であるが、この小論の原稿に目を通してご指摘頂いた本学の大野精一教授と永井准教授に御礼を申し上げる。

注

1）　拙稿「斎藤喜博をめぐる文献リスト作成と主要文献解題」日本教育大学院大学紀要第 1 号 2008

2）　拙稿「ある校長経験者からみた斎藤喜博の校長像ーその光と影」日本教育大学院大学紀要第 2 号 2009

3）　拙稿「ある校長経験者からみた島小以後の斎藤喜博の校長像ー境東小学校と境小学校」日本教育大学院大学紀要第 3 号 2010

4）　「斎藤喜博全集第 15 巻 2」P294～456 と「第二期斎藤喜博全集第 12 巻」P529～606

5）　第二期「斎藤喜博全数第 12 巻」P607~608

6）　笠原肇著「評伝　斎藤喜博」P221~222

7）　「斎藤喜博全集第 15 巻 2」(1911.3~1971.7）と第二期斎藤喜博全集第 12 巻（1971.8~1981.7）のそれぞれ末尾に年譜が分冊されている。以下日程はすべて年譜から要約掲載されている。「第二期斎藤喜博全集第 12 巻」P607

8）　「第二期齊藤喜博全集第 12 巻」P607

9) 過密日程の一例をあげると、1975 年 9 月 14 日午後本郷学士会館で教授学研究の会、16 日昼羽田空港発、夕方 5 時 40 分～9 時室蘭啓明高校体育音楽指導、職員と会食。17 日原稿執筆夕方 5 時 40 分～9 時 15 分啓明高校で合唱指導と授業見学、18 日原稿執筆 5 時 45 分～9 時 15 分合唱指導、全校行進合唱指導、会食　19 日千歳空港 11 時 15 分発、帰宅 4 時、21 日第 3 日曜の会 36 名、23 日三越陶器内覧会、相撲見物 10 時帰宅、24 日朝出発三沢 17 時過ぎ着、十和田市教育長他と会食、25 日三本木中 9 時～4 時学級合唱指導、26 日三本木中午前跳び箱指導他、午後全校合唱指導、三沢発 17 時 21 分特急仙台 9 時 30 分、27 日宮教大教授学ゼミ、国語教材研究、体育、合唱指導、3 時半から第 4 土曜の会、夜会食、28 日 10 時～3 時林竹二氏と対談、帰宅 10 時、夜発汗、30 日東京発ひかりで三原 19 時，教育長・校長らと会食、10 月 1 日大田小全校授業他見学、合唱指導、2 日合唱他指導、3 日指導、体育指導、全職員と会食、4 日三原 11 時 20 分ひかり、帰宅 7 時半。………もっと過密な日程は少なくない。無理な日程の他にもうひとつ健康悪化を加速させたのは、飲酒であった。自宅では飲まなかったと長女齊藤草子が証言しているが、年譜を見ると外での飲酒の機会が多い。もっぱらビールを飲んだようであるが、彼と酒食の機会が多かった横須賀によれば、飲みだすと食事を殆ど取らず延々と自虐的に飲み続け、諫めても止めなかったそうである。

10) 1973 年に教授学部会から教授学研究の会に移行した。

11) 横須賀薫「斎藤喜博　人と仕事」国土社 1997　P 90～92 。ここで 横須賀は、吉田章宏の記録（「教授学研究の会 1 年の歩み」『教授学研究 5』国土社 1974 を引用しながら説明している。

12)「総合教育技術 1981.10. 特集＝斎藤喜博―その人と仕事に学ぶ」P 58~61。また「第 2 期斎藤喜博全集第 6 巻 P39 ~67 に「低学年の音楽の授業」という題で御影小学校での斎藤の授業記録（1971.6.23~24）が掲載されている。テープからとったのは照屋勝である。

13) 授業中に教授者を前にして横から口を挟む授業。島小校長の時、斎藤は授業によく口出しをしたと書いている（斎藤喜博編著「介入授業の記録上」一莖書房 1978　P 5。このシリーズは全部で 5 冊、上中下、続、続々、ある。

14) 斎藤喜博が境小で創作した表現活動の一種。歌、合唱、舞踊、演劇を組み合わせ、物語が進行する。表現を通じ、自分の内面を解放することで、自分を積極的にし、友達との交流を円滑にする狙いがある。境小では島小の指導をそのまま繰り返さないという斎藤の考え方から、踊りを母体に生まれたと、大槻志津江（元境小教諭）は話してくれ

15) 山内宣治「わたしの校長奮闘記」一莖書房Ｐ6~8

16) 同上Ｐ19～20

17) 同上Ｐ150～156

18) 同上Ｐ156～264 二詳しい。著者によれば、山内校長は 4 年かけて教員への説得を積み重ねて校長のリーダシップを取り戻した。すなわち反対されていた斎藤教授学の同志宮坂義彦を講師に呼んで公開研究会の内容を改革し、最後の卒業式では郡内でただ一校ピアノ伴奏つきで君が代斉唱を実現、他校よりハードな実践にも関わらず転勤希望者はやむ得ない事情を抱えた 3 名だけだったという。大田小のすぐそばにある県立世羅高校の石川校長が組合員と教育委員会の板挟みになって自殺していることを考えると、よくぞ教員の意識を改革できたと思う。

19) 例えば後藤清春「人間と教育の可能性」一莖書房 2003. この本の中で、当時大分県の若い小学校教員だった後藤

は、同僚の渡辺達生と長崎県森山東小の公開研究会へ出かけで斎藤喜博と出会いショックを受けた。後藤はこれからどう指導していくか重い課題を前にして押しつぶされそうそうになった。同僚の渡辺は、それまでの仕事があまりにも浅はかで軽率だったと感じ、「もう教師は辞めねばならない」と家人に言ったと、後藤は書いている。しかし二人は受けた衝撃をばねにして教育界のリーダーに成長している。この例のように、斎藤の学校行脚で脱皮した教師は他にもいることは、十分考えられる。

20）もっとも指導に当たっている高橋元彦（元境小教諭）は、形は整っているが、斎藤が指導した境小に心は及ばない。それでも何もしないよりずっと良いと話している。

21）齊藤は、宮教大教授に招聘されたとき、大学のスタッフ、学生、院生だけでなく、広く県内外の教員や研究者に門戸を開き、参加者が実践に際し直面する教育や研究上の問題や疑問を持ち寄って発表、質問、討論をする会を提案、実現を見た。開催日は毎月第四土曜日、会の代表には斎藤の指示で横須賀助教授（当時）がなった。斎藤の自宅で開かれていた第三日曜の会が斎藤の念頭にあったと考えられる。

22）「第二期斎藤喜博全集第 1 巻」Ｐ403~418「教授学ゼミ」と「授業研究と教授学演習」という題で、大学での経験を踏まえ教師養成教育に対する考え方を述べている。また「第二期齊藤喜博全集第 5 巻 P142 ~195 に「宮城教育大学での体育の授業」の記録が掲載されており、斎藤の大学での授業の一端を知ることができる。

23）前掲　横須賀薫「斎藤喜博　人と仕事」Ｐ98

24）副島羊吉郎「斎藤さんの集中講義」第 2 期斎藤喜博全集第 12 巻月報ＸⅡ　Ｐ3~5

25）当時宮城教育大学長だった林竹二は、「授業分析センターが設置されたとき、選考委員会は初代の専任教授に斎藤さんを選んだ。･･････（中略）････この人事は既定の 2／3 の賛成票が得られないで、一旦躓いた。斎藤さんが学校現場で創り出した強大な事実を持つ独創性・意味ふかさが教員養成を任務とする大学の教授会でさえ正しく評価できなかったのである。なんとも情けない話だが、斎藤さん以外に適任者がいないところから、異例の再提案となってこの人事は実現した。半年足らずの任期が終わったあとも、斎藤さんと宮教大の協力はつづいた。」と総合教育技術 1981.10（前掲）Ｐ13 に書いている。

26）前掲「斎藤喜博　人と仕事」Ｐ96~97 宮城教育大学教授に就任して

27）研究者の多くは、教授学研究の会の会員。大学で教員養成に携わる人が多かった。

28）「事実と創造」第 18 号 1982.11 に「斎藤文代氏の逝去を悼む」特集欄が設けられている。

29）～数名とあるときは 5 名加算、約～名はそのまま計算。ＮＨＫ撮影日に 2 回参加人数の記載がない日は、前後の参加人数 36 名と 35 名を加えた。結果合計 3460 名。誤差を考え約 3500 名とした。

30）宮原誠一とは、斎藤が群馬県教組文化部長のときからの知り合いで、1951 年 3 月に玉村町に迎え農村座談会を開いている。

31）前掲　横須賀薫「斎藤喜博　人と仕事」Ｐ65~68

32）この部分についての経緯は、前出　横須賀薫「斎藤喜博　人と仕事」Ｐ65~96 をご覧いただきたい。

33）前掲　横須賀薫「齊藤喜博 人と仕事」P46 ~48 で、横須賀が教授学研究の会は、歌会をモデルにした研究会であったと指摘、島小、境小、学校行脚対象校もそれぞれ歌会であったと、斎藤のワンマン運営を分析している。

34）前掲　横須賀薫「斎藤喜博　人と仕事」Ｐ147~173

35)「教育総合技術」1981.10　P 13

36) 本文前掲、林竹二「授業 人間について」の序文冒頭で彼は「私は、この 2 年ばかりの間に、80 回ばかり、小中学校で授業をした。その大部分が、『人間とは何か』を主題とするものであった」と書いているように、齊藤に比べて授業の幅が限られている。

37) 林竹二「教育の再生を求めて　湊川でおこったこと」筑摩書房 1977　P17 ~24 「湊川からの報告」の中で、1977 年 2 月に初めて湊川高校に入り、定時制 2 年で授業をした林は「人間を人間たらしめるものは何かを考えさせた。私は、湊川のこのクラスでの授業のように、私の授業を深く重く、まっとうに受け止めてもらった経験をもたない…後略……」と書いている。

38)「第二期齊藤喜博全集第 6 巻」国土社 1984 P342~386 に湊川高校定時制での齊藤の授業記録の一部が復元されている。

39) 例えば、前掲「教育の再生を求めて 」に掲載されている授業の記録 P80 ~156 。

Research Paper

Investigating the Activities of Saito Kihaku After He Retired from Public School Principal

Kubota, Takeshi

Saito kihaku(1911~1981)was one of the most distinguished educators in Japan after the Second World War. He worked seventeen years as Principal (1952~1969) of three local primary schools in Gunma Prefecture, Japan, and drastically improved minds and skills of teachers and the motivation and scholastic achievement of pupils. He was also a very good writer. His Complete Works of 18 volume were also published in 1969~71 by Kokudosha. After he retired from principal's post[1)]in 1969 at the age of 58, Saito started amazingly energetic actions in various fields. This is just the aim of this paper to overview his activities between 1969~1981.

Of this period, his core activity was to help improve many schools—primary, secondary, and even tertiary[2)] level, by request of a great number of institutions. When he assisted schools, he used freely his profound professional knowledge and outstanding skill in teaching. Thus, he addressed and taught at a lot of schools[3)] ,often taking his followers, throughout Japan. It was as if he were a pilgrim educator. Second, Saito held a study meeting every third Sunday at his home and many teachers and researchers joined to be guided by him. Thirdly, Saito was a leader of the Teaching Method Society, which usually held big meetings three times a year. Furthermore, Saito wrote many books, essays, papers of education concerned, and presided Gunma branch of a big Japanese poetry society. Such a busy life for a retired senior might probably resulted in overwork and shortened his life. Actually, he passed away at the age of seventy by chronic liver disease. However, he greatly contributed and added more heritages to educational community. Even now, there are still ex-teachers and ex-professors who are eagerly engaged in teaching Saito's heritage to schools, etc.

Key words: Saito Kihaku, a Pilgrim Educator, the Third Sunday Meeting, the Teaching Method Society, Successors of Saito's Heritage

Notes

1) As for Saito's activities during Principals period, the author has already presented two papers in Journal of Japan Professional School of Education Vol.2,2008~2009 and Vol.3,2009~2010.

2) Saito taught at 6 universities as lecturer., and at one university he also worked as professor for .eight months.

3) He taught at 51 schools and 6 universities, of which 11 schools and 5 universities he repeatedly visited to teach.

4) Totally 93 meetings were held, attending about 3,5oo participants between 1967~1980.